オトナの過程 Vol.5

2020年10月1日
総明会広報委員会
『M』編集部会

紫紺祭「体験型脱出ゲーム」仕掛人の流儀

石曽根 毅

2015年明治高校卒（男子硬式テニス部）。現在、明大院先端数理科学研究科。

山田 豊大

2015年明治高校卒（男子硬式テニス部）。現在、明大院先端数理科学研究科。

猿楽町時代は、ピロティにひしめく露店など、部活動単位の企画が中心だった紫紺祭。20代・30代の卒業生には、クラス単位の企画と言えば、お化け屋敷「勉蔵始めました」を思い出す、という方も多いのでは。

調布移転後、高校の各クラスが企画を競うようになると、お化け屋敷やゲーム・縁日などに加え、新たな趣向が次々と登場。近年流行しているのが、「体験型脱出ゲーム」だ。

2018年には、計3クラスがこの企画に挑んだほど。ブームの火付け役となった、2015年卒の2人に聞いた。

二〇一四年の紫紺祭で、革命的な催し物に挑んだクラスがあった。高ⅢB、二八名の理系クラス（担任・西村英之先生）。今では定番企画の一つとなった「体験型脱出ゲーム」を、初めて実施したのである。「体験型脱出ゲーム」は、二〇〇七年に誕生し、今や全国規模で展開される体感型イベント。参加者は、力を合わせて謎を解き、特定の部屋や状況から脱出しなければならない。

高ⅢBの企画した「大脱出THEATER」は、三ステージに分かれ、参加者は用意された六セットの問題のうち一セットを与えられる。ステージ1とステージ2は映像から出題され、最終ステージでは、図書館風の内装部分に進む。参加者は一〇人程度で一グループを組み、約一五分間で出演者を脱出させるというミッションが与えられた。

「体験型脱出ゲーム」には、参加者をとりこにする物語性と、彼らをうならせる問題が必要だ。それを文化祭で実施することが如何に難しいか想像に難くないだろう。仕掛人は、山田豊大と石曽根毅。山田が姉から「体験型脱出ゲーム」の話を聞き、立案したことが発端となった。

▲ 紫紺祭当日の高ⅢB（当時）

「実は提案した時は、まだ本物の体験型脱出ゲームを僕自身体験したことがなかったんです」。

山田をはじめ、クラス全員が未経験者。しかし、多くのクラスメイトが、この今までにない企画を支持してくれた。そう語る山田の顔はどこか誇らしげだ。

物語や内装を山田が、出題を石曽根がリード。初めて九月に開催されたこの年の紫紺祭。夏休みをかけて、入場者への説明・出題用の映像を撮る。編集は山田が自宅で行なった。一方、もともと謎解きが好きだった石曽根は、クロスワードや暗号解読の問題を、一〇〇問以上作った。

「脱出成功率は一二パーセントでした」とほくそ笑む顔に、出題者の勝利がにじみ出る。

「クラスみんなで、参加者にヒントを出したり、グループ入れ替えの準備をしたりと、大忙しでした」という二人の話から、全員が協力して成功を収めたことがうかがえる。開催当日は大人気。待ち時間も楽しんでもらえるようにと、急遽お試し問題も用意した。四回来たリピーターもいたそうだが、「そのたび違う問題を出しました」と、石曽根は余裕の表情だ。

先駆者の二人に、今後紫紺祭で「体験型脱出ゲーム」を企画する後輩たちへのアドバイスを求めると、山田は「映像を使った説明や出題は欠かせません。説得力が違います」と力説。また文化祭では、回転率の問題で、制限時間二〇分が限界だという。石曽根は「一度解いた問題が、他の問題のヒントになるような、伏線をはりめぐらせるとさらに面白かったかもしれませんね」と経験を振り返る。文化祭では、ルーム型に加え、ボックス型という形式も増えているのだという。

「僕たちがやっていたものより面白くなっていたら嬉しい」と、二人は今後の「体験型脱出ゲーム」企画に期待を寄せた。

（担当：林田）

INTERVIEW 小林麻衣さん

明治中高を卒業後、短大進学という道を選んだ小林さん。進路選択や、高校時代の積極的な学外活動について、話を聞く中で、「自分らしく」という、1本の軸が見えてきました。

PROFILE

2019年明治高校卒。中学時代はバドミントン部。高校では生徒会本部・有志料理研究会所属。現在、国際短期大学国際観光コース2年。中2から5年間、『過程』編集委員。高Ⅱでは文化祭準備委員。

◆短期大学二年生の小林さん。そもそもなぜ短大に？

もともと、伝統的な木造建築の分野に進みたいと思っていたのですが、ぴったりの進学先が見付からず……。だからそもそも、進学はせずに就職するつもりでした。そんな時、母が「人に関わるお仕事について学べるところがいいんじゃない？」と。

旅行も好きだったので、エアラインに興味を持ちました。ただ就活のことも考え、エアラインの専門学校よりも、幅広い分野を学べる短大を選択。現実を直視し、何が最善なのかを考えて、行動したと思っています。

◆短大ではどんな勉強を？

接客業に特化した短大で、マナーやホスピタリティを中心に学んでいます。私は、ホテル・エアライン業界について学べる国際観光コースを選びました。秘書・事務スタッフや、英語を使う仕事を目指すコースもあります。

航空・旅行業界では、語学力や接客マナーが求められるので、その辺りを重点的に履修しました。

◆「エアラインビジネス」「インバウンド戦略入門」……。科目名を見るだけでも、実践的で面白そうですね！

実習もたくさんあります。一年次には航空系企業の訪問。二年次には三泊四日でグアムに行き、日本と海外のホテル・ブライダル業界の違いを肌で感じる機会も。インバウンドの方々を対象に、上野・浅草で観光案内の英語ボランティア実習もしました。

◆二年間だから密度が濃いですね！ いま、進路選択をどう振り返りますか？

大事なのは、どんな選択をするかではなく、自分が選択した道を、強く生きられるかどうかだと考えています。その原動力となるのは、親・先生・友達の助言ではなく、なぜその選択をするのか、どうしたいのかを自分に問うて、出した答え。自分で心から納得したからこそ、進んだ道だと思っています。

◆「自分らしく」という、ぶれない軸があるのですね。明校時代も、新しい世界へ積極的に飛び込んでいったとか。

自分らしく、学外活動にも積極的に取り組みました。例えば、高Ⅰで入った地元の御囃子。五人囃子は、とんび（篠笛）、調べ（締め太鼓）の真（低音）と流れ（高音）、大胴（鉦留め太鼓）、四助（鉦）で構成されていますが、私は主に「流れ」と「四助」を任されています。踊りで「ひょっとこ」も少しかじっています。

◆学校外でも、大規模な文化祭のようなものに関わっていたと聞きました。

高Ⅲの時には、学校の枠を超えた総合文化祭の実行委員会で活動しました。バンド・ダンス等の出演者に加え、企画・運営も全て高校生。著名人をゲストに呼んだりもします。私は渉外部門で、企業にメリットを伝えつつ、スポンサーになってもらえるよう交渉する仕事でした。やりがいを感じましたし、人と関わることが好きだと再認識する場にもなりました。

▲ 山車の上にて。祭囃子演奏中。

◆自分は中高の頃、学校が生活圏の全てだったので、そのバイタリティはすごいなと。

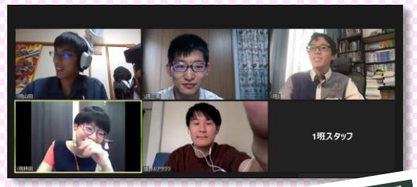
全然そんなことないですよ～。同級生にも、高校の頃から音楽制作ソフトで作曲をして、今はYouTubeで公開もしている友達がいたり、学外に活躍の場を広げる人は多かったと思います。

マリリン・モンローが、「We are all of us stars, and we deserve to twinkle.」と言ったように、誰もが素敵な能力・可能性を持っている。私も、誰かが決めた常識の中で、自分を否定し苦しんだことがあります。でも、自分を認め愛することで、強くなりました。以前の私と同じような境遇の方がいたら、その人には、もっと自分を愛してほしい、誰よりも自分自身の味方であってほしいですね。

（担当：坂本・井畔・三浦）

新型コロナと特別な１年

自粛疲れからの「脱出」



会場・オンラインとも、１人 2000～3000 円程度のものが多い。

外出自粛中でも楽しめるイベントを求めた本誌記者が、山田・石曽根両氏（1 頁目インタビュー参照）を迎え、オンライン版「体験型脱出ゲーム」に挑戦。SCRAP「終わらない学級会からの脱出 リモート授業 ver.」（1 グループ 6 名まで）。Zoom、LINE、Google スプレッドシートの準備が必要だ。

リモート授業のクラスで、「班ごとに卒業試験を受ける」という設定。先生役から LINE に出題される数々の問題を協力して解く。制限時間は 60 分。あらゆることがヒントになるため、見逃せない、聞き逃せない緊張感が続く。

ほぼ初心者の記者たちが、出題の意味もわからず手を止めている隙に、ゲストの両氏が物凄い勢いで解いていく。月に 1 回程度「体験型脱出ゲーム」に参加しているという猛者は、やはり違う。最終問題まで進んだが、惜しくも脱出失敗。悔しさを噛みしめつつも、ひと夏の思い出となった。

本来はホールなどの会場に赴き体感するゲーム。コロナ禍からの一刻も早い「脱出」を願いつつ、新たな自粛期間の楽しみを見出すことができた。（担当：林田・朝倉）

最後に、2014 年の紫紺祭で、石曽根氏が作成した問題を掲載する。皆さんも挑戦してみては。

秋	→ 46	富士見町	→ 555678
紫紺祭	→ 24477	東京都	→ 347678
調布市	→ 34586	関東地方	→ ？

法則を見つけ，８桁の暗証番号を導き出せ

Hint
漢字を平仮名に変換して考えるべし！

解答・解説は、「オトナの『過程』M（明治中高同窓会広報誌）」Facebook にて！

ちょっと聞いていただけますか？ 20 代のコロナ禍事情

仕事

在宅勤務だと仕事だけに集中できない！

時差通勤でも 16 時退社を逃がすと結局夜遅くなる。

あとクラウド化でお金がかかる……。
（出版業）

マスクで言葉が生徒に伝わらない。聞き返されたり、専門用語を間違えてノートにとる子も。（教員）

学生生活

友人の理系院生に聞いたら、ゼミはオンライン。研究室での実験は出来たが、登校時には検温と学生証提示が必須とのこと。（理系卒）

一時期、図書館が閉まったのは痛かった。ふと思いついた時に調べものができないのがなあ……。（院生）

私のゼミは Web 会議ツールを使っての発表形式だったけど、録画授業のところもあったらしい。先生方も対応が難しいんやな。
（文系学生）

バイト

始めたいのに募集してないって。（学生）

動画生配信授業だが一方的なかたちに……。課題や教材は郵送。（塾講師）

就活

当初目指していた業界や、内定をいただいている業界について、コロナの影響をいろいろ考え、迷ってしまう。（学生）

リモート面接での目線はどこが正解？（社会人）

★いずれも、『M』編集部会メンバーの体験談より。（担当：井畔）

それでも、キャンパスライフ。

学生運動、自然災害、感染症……。大学 1 年次に、例年とは異なる状況に直面した 3 つの学年。制約の多い日々をどう過ごすか、考えます。

ロックアウト
1974 年卒　粟野哲也先生

明大入学は一九七四年。学生運動の最後の頃で、立看板や学生集会を遠巻きに見ていました。大一の一一月くらいに、授業料値上げの話が出て、学生運動側が反発。徐々にエキサイトして、バリケードを作ったり、ヘルメット姿で講義になだれ込んできたり。一二月初旬頃、大学側がキャンパスを「ロックアウト」。授業・期末試験が中止になりました。代わりにレポート一三科目分の束が送られてきたのを覚えています。

次の四月までを、どう有意義に過ごすか。思い付いたのが専修学校での中国語会話です。短期コースで、中国への転勤が決まったビジネスマンらと席を並べました。明校教員になってから、中国の交換留学生が来て、中国語で歓迎の挨拶をしたことも。留学生にはあまり通じなかったようですが、生徒には大ウケでした（笑）

もう一つが夏から始めた家庭教師。一日で三軒をこなす過密スケジュールでしたが、教職に就く上で良い経験になったかもしれません。

私の場合、一年次も半年くらいはキャンパスに通えました。その意味で今の大一は、本当に気の毒ですね。ただ、この期間も人生の貴重な時間の一部。フルスペックでなくても、やれることをやってほしいです。

長年歴史教育に携わってきた者として言えるのは、どんな出来事にも始まりと終わりがあるということ。コロナにも必ず終わりが来ますから。（談）

新型コロナ
2020 年卒　S・Y さん

明大政経学部
経済学科１年

高校卒業式は縮小開催。外部の方は入れず、極力しゃべらないというかたちでした。保護者も生徒一人につき一人と決まっていて。式後の卒業パーティーも出来ませんでした。明大の入学式（両国国技館）も中止、ガイダンスは全てウェブ開催。シラバスや資料を自力で解読するのが大変でした。

授業は資料提示型・動画配信型・リアルタイム型と三種類ありますが、自分は動画配信型が多いですね。指示に従って課題を提出。先生が学生の意見に反応して下さる授業だと、モチベーションを保ちやすいですね。語学の先生が Zoom で、学生の自己紹介やグループ活動の時間を作って下さり、クラスに友人も出来ました。実際に対面で会えた人もいます。

ただ一方で、先生の顔を知らずに終わってしまった授業も。体育もオンラインで、縄跳び・ジョギング・筋トレの三種類から選び、二週に一回ミーティングという形式です。テストもオンラインなので、きちんと実力がついているか、逆に心配に。例年と異なり、サークルの情報も、自分から積極的に動かないと、入ってこないですね。

今大学に求めるものは、やはり人に会うことです。正直なところ、和泉キャンパスに行ったことが無いので、施設が使えなくて不便だという発想はあまりありません。大学は人と会う場所。人と会って繋がらないと、始まらないですよね。（談）

東日本大震災
2011 年卒　本誌記者（三浦）

私たちの学年は、東日本大震災のちょうど前日に、高校卒業式を迎えました。

明大の入学式（日本武道館）では、同期の米山将基さんが、代表として宣誓を読み上げる予定でしたが、結局中止となり、宣誓の文章が、後日手続き書類に同封されてきたのを覚えています。

授業期間は短縮されましたが、入学した文学部では、学問自体が再編されていく過程を目の当たりに。歴史学や地理学の授業も、災害や自然という視点から、大きく組みかえられました。震災の衝撃が、進路選択のきっかけになった、という同期も少なくないかもしれません。

今の大一は、コロナ禍の中で何を考え、何を摸索し、何を選択していくのでしょうか。
（担当：三浦）

『M』編集部会メンバー

○	林田こずえ	2011 年卒
●	高橋　凌士	2011 年卒
○	三浦　直人	2011 年卒
●	朝倉　貴紀	2012 年卒
○	土屋　　弦	2014 年卒
●	岩田　澪夏	2015 年卒
○	坂本　駿太	2015 年卒
●	塩出　研史	2015 年卒
○	垣　日菜子	2016 年卒
●	髙波　茉生	2016 年卒
○	井畔杏里紗	2018 年卒
●	小林　麻衣	2019 年卒